小学校　社会科　部会

部会長名　香春町立香春小学校　　校長　高瀬　美智也
実践者名　川崎町立川崎東小学校　教諭　牟田　佳史

1　研究主題及び副主題

思考力・判断力・表現力を育む社会科指導のあり方
～単元のねらいに迫る体験活動の設定による言語活動の充実を通して～

2　主題設定の理由

（１）社会の要請から

現在、私たちが生きる社会は変化の激しい世の中であると言ってよい。世界の状況を見れば、今後、大きな社会構造の変化が起こると考えられる。世界人口の増加にともない今までの大量生産・大量消費・大量廃棄型社会では有限である地球資源に与える負荷が大きすぎるため、さらなる発展を望むことができない。これに変わる社会構造として持続可能な社会の創造を行う必要がある。そのために、これまで蓄積してきた知識や技術を最大限に活用し、競争力の向上や技術革新に積極的に取り組んでいく「知識基盤社会」と言われる社会への移行が求められくる。このような社会を生きていくには幅広い知識と柔軟な思考力に基づく新しい知や価値を創造する能力が必要となる。

また、グローバル化が年々加速し他国との激しい経済競争や親密な国際連携を避けては国際社会の中で生きていくことが難しい時代になってきている。このことは、異文化交流を促進したり異文化理解したりするコミュニケーション能力も必要になってくることを意味している。

そして、我が国の児童・生徒の学習に関する実態は、国際的な学習到達度調査であるOECD学習到達度調査（PISA）やＩＥＡ　国際数学・理科教育動向調査（ＴＩＭＳＳ）等から読解力や学年が上がるにつれて低下している理数科における興味・関心といった課題が明らかになってきている。

（２）学習指導要領の趣旨から

現行の学習指導要領では、「生きる力」をはぐくむという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。また、言語（言語活動）や理数の力などをはぐくむための教育内容を充実させ、授業時数も増加させている。

また、各教科等の指導に当たっては，体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに，児童の興味・関心を生かし，自主的，自発的な学習が促されるよう工夫することが求められている。さらに、「生きる力」をはぐくむためには、学校・家庭・地域が相互に連携しつつ、社会全体で取り組むことが不可欠であるという観点から、地域や学校の実態等に応じ，家庭や地域の人々の協力を

得るなど家庭や地域社会との連携を深めることを求めている。

（３）児童の実態から

本学級の児童は、社会科学習において地域（川崎町）のことについて知識が豊富であり伝統行事に参加したことがある児童もたくさんいる。しかし、これらの経験を学習の中で話したり、考えたことを書いたりすることはできていない。また、自分の住む県のよさについて理解している児童はほとんどいない。その理由としては、「どう話したらよいのか」や「どう書けばいいのか」が分からないからという技能面の課題と同時に周りの人とどうのように自分の思いや考えを伝えていくのかというコミュニケーションの面の課題が考えられる。

このような課題を改善させるには、体験活動を通して、自分の言葉で人に伝えたいと思わせる活動を仕組むことでコミュニケーションを図ろうとする気持ちを持たせ、調べて分かったことを発表の仕方やまとめ方などを発信しようとする力を付けさせることは、本学級の課題である表現力を高めさせる観点から大変有意義なことであると考える。

３　主題の意味

（１）「思考力・判断力・表現力を育む」とは

人が直面した問題を解決するときに使う力で、「現状や過去の経験などから様々な情報を取り出して関係づけて考える力」「情報の軽重や関係づけ方の正否などを判断する力」「思考・判断した結果を相手に分かるように表現したり、考えを練り合ってよりよい考えに高めたりする力」を育むことである。

（２）「単元のねらいに迫る体験活動の設定による言語活動の充実を通して」

授業で単元の目標を設定し、単元における目標を達成させることをめざすものでありこのねらいに迫るために児童の興味関心をかき立てるような体験活動を仕組むことをさしている。体験活動の内容としては、見学したり地域の方の話を聞いたり何かを作ったりと多様な活動の設定を考える。

また、「言語活動の充実」とは、（１）体験から感じ取ったことを表現する。（２）事実を正確に理解し伝達する。（３）概念・法則・意図などを解釈し，説明したり活用したりする。（４）情報を分析・評価し，論述する。（５）課題について，構想を立て実践し，評価・改善する。（６）互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させる。

これらの活動を授業のねらいと照らし合わせせながら取り入れ、充実させていくことである。

４　研究の目標

社会科における思考力・判断力・表現力を育成するための具体的方策として単元のねらいに迫る体験活動を仕組むことによって、児童が体験して自分で考えたことや判断したことを自分の言葉で表現し他者へ伝えたいと思うような指導のあり方を探っていく。

5　研究仮説

社会科学習指導において、下記のような方策を取り入れれば児童の学習意欲が高まり、思考力・判断力・表現力を養うことができるであろう。

①　単元のねらいの精査
②　児童にとって単元のねらいに迫ることのできる体験活動の設定

6　研究の計画（授業の計画）

（１）小単元「焼き物を生かしたまちづくり」

（２）小単元の目標及び指導計画

小　単　元	焼き物を生かしたまちづくり	総時数	７時間	時期	１月
単元の目標	○　小石原焼に関心を持ち、意欲的に学習計画を立て調べることができる。（関心・意欲・態度） ○　小石原焼が、伝統的な地場産業として発展してきた理由や小石原焼を生かした東峰村のまちづくりについて考え、適切に表現できる。（思考・判断・表現） ○　写真資料や実物などから、小石原焼の人気の高さを読み取ったり、その特徴や持ち味を感じ取ったりしている。（技能） ○　小石原焼の成り立ち、それを守り発展させてきた生産者の工夫と努力や焼き物づくりと結び付いた東峰村の地域的特色について理解できる。（知識・理解）				

次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点（援助・支援）
1	1	県内の特産物や観光で知られる地域に関心をもち、調べたい地域を意欲的に選び出すことができる。	県内の特産物や観光で知られる地域（東峰村・柳川市）を調べる対象として選び出す。	・県内の農林水産業の盛んな地域や多くの人が訪れている場所を教科書や県の観光案内パンフレット等から調べさせるようにする。
	2	小石原焼について調べたいことを明らかにして、学習問題をつくることができる。	小石原焼について調べる学習問題をつくる。	・小石原焼きについて知っていることを出し合わせる。
	3	小石原焼の特徴をつかみ、この焼き物がどのようにして広く知られるようになったかを理解できる。	小石原焼の発祥から現在までの歩みと、広く知られるようになった理由を調べる。	・小石原焼きの実物を見せ、特徴を捉えられるようにする。

	4・5 本時	焼き物づくりを体験して、焼き物をつくるときの作業工程や技法などについて知り、作り手が気をつけていることや努力していることを考えることができる。	焼き物づくりの作業工程や技法などを体験し、作り手が注意していることや努力していることについて考える。	・地域の講師の方に感謝の気持ちを持って教えてもらうように助言する。
	6	小石原焼の作業工程と技法，使われる材料について調べ，作り手が気をつけていることや努力していることを捉えることができる。	小石原焼の作業工程と使われる材料，作り手が注意していることや努力していることについて調べる。	・焼き物づくりを体験した後なので、やってみたときに気付いたことや感じたことなどから、作り手が気をつけていることや努力について捉えることができるようにする。
	7	小石原焼が盛んにつくられるようになったわけと，焼き物を生かしたまちづくりについて考えることができる。	小石原焼が盛んにつくられるようになったわけと，焼き物を生かした東峰村のまちづくりについてまとめる。	・道の駅の写真等を用意して焼き物を生かしながらまちづくりが行われていることに気付くようにさせる。

7　指導の実際

（1）主眼

焼き物づくりを体験して､焼き物をつくるときの作業工程や技法などについて知り、作り手が気をつけていることや努力していることを考えることができる。

（2）授業仮説

本時において、以下の手立てをとれば、焼き物作りの作業工程や技法がわかり、小石原焼きの作り手が気をつけていることや努力していることを考えることができるであろう。

①　作り方を教えてもらい、自分なりの工夫をしながら焼き物を作らせる。 ②　焼き物づくりをやってみての感想や小石原焼きの作り手にたずねたいことを文章で表現させる。

（3）準備

教師：陶土、紙皿

児童：ヘラ、ワークシート

（４）展開

段階	学　習　活　動	指導上の留意点・支援
導入	1　前時学習を想起し、本時のめあてを確認する。	○　小石原焼の発祥から現在までの歩みと、広く知られるようになった理由を思い出させ、めあての確認をする。
	いろいろなくふうをしながら、焼き物をつくってみよう。	
展開	2　講師の先生（すみれアクティブセンター：柏木さん、原口さん）からつくり方の説明を聞く。	○　講師の先生からつくり方の手順を説明してもらう。 ○　成形のしかたや焼いたときにひび割れにくくするための工夫などを教えてもらう。
	3　焼き物をつくる。	○　色々な工夫を凝らすために、ヘラやスポンジなどの道具を使うように助言する。
	4　焼き物つくりを体験し、感想を交流する。	○　焼き物づくりで、工夫したところや難しかったところなどを交流させる。
まとめ	5　本時の学習をまとめる。	○　教科書の中に紹介されていた小石原焼きの作り手の方に、自分が焼き物づくりをして伝えたいことを手紙形式で文章化させることで作り手の工夫や努力を想像できるようにする。

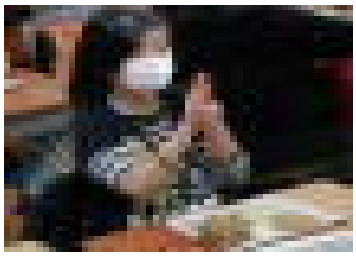
8　授業の考察

授業の導入段階では、焼き物づくりの講師であるすみれアクティブセンターの方から陶土を紐状にしながら底の方からだんだんに形を整えながら成形していくことを教えてもらった。子どもたちは、柔らかな陶土が形を変えていくことに目を凝らして興味を持って見聞きする様子が見られた。子どもたちの中には、積極的に模様の入れ方や形の整え方を講師に質問をし、自分の作品づくりに反映させたいという強い思いが感じられる子どもの姿が見られた。

＜写真１　講師の話を聞く様子＞

展開の段階では、いろいろな工夫をして作品をつくることをおさえた上で作業をさせた。いろいろな工夫としては、模様や形状、使い安さなどを助言した。子どもたちは、すぐに思い思いの作品づくりに取りかかっていた。しかし、なかなかうまく思うような

形ができずにくずしてはつくり、くずしてはつくりをくり返す子どもやどんな工夫ができそうか考え悩んでいる子も見られた。このような子は講師に声をかけて質問をしている様子が見られ積極的にコミュニケーションを図る姿が見られた。表面をスポンジで滑らかにしながら、ヘラで波形の模様を入れたり、蓋付きの入れ物を作ったり、取っ手を付けたりとさまざまな工夫をした作品を１時間余りでつくることができた。



＜写真２　焼き物づくりの様子＞　　**＜写真３　出来上がった作品＞**

まとめの段階では、焼き物づくりをやってみての自分の感想と同時に小石原焼きの作り手にたずねてみたいことなどを書かせた。すると焼き物づくりを体験した子どもたちは小石原焼きの作り手と同じ視点に立ち自分の思いや考えで文章表現することができていた。

このような活動を通して焼き物づくりがどのようなもので、それに携わる人々の努力や工夫に思いを巡らすこをを身を持って体感することができたと考えられる。

＜資料１　まとめの段階で書いた感想より＞

○　最初は簡単だと思っていたけど､途中で穴があいたりして難しかったです。
○　形をつくったり整えたりするのがとにかく難しかった。
○　焼き物づくりがこんなに大変だとは思いませんでした。でも楽しかったです。もう１回やってみたいと思いました。

＜資料２　まとめの段階で書いた小石原焼きの作り手に尋ねたいことより＞

○　陶土をつくるのに何時間かかりますか。
○　焼き方にも工夫があるのですか。
○　なぜ、あのように上手に焼き物をつくれるのですか。
○　焼き物づくりで一番、難しいのはどんなことですか。
○　焼き物づくりをたくさんしていて大変じゃないですか。

9　成果と今後の課題

＜成果＞

○　焼き物作りを実際に体験することで、子どもたち自らが作り手としての視点をもって、小石原焼きの作り手の努力や工夫について考えることができた。

○　体験活動を仕組んだことで小石原焼きの作り手の方と言葉（文字）によるコミュニケーションを図ろうとする姿が多数見られたこと。

○　教科書教材が子どもたちにとって体験活動を設定することで身近なものとなり興味・関心を引き出させ学習意欲を高めることができた。

＜課題＞

● 小石原の焼き物づくりに関しては、体験活動をすることで興味・関心は引き出せたが、東峰村のまちづくりまで興味・関心を持続させることができなかった。

● 今回は、この単元の指導時期に講師の先生に来てもらい教えていただくことができたが、来年度も同じようにできるとは限らないので学校の教育計画に位置づけたり、地域との連携をさらに図ったりする必要がある。

◎ 参考文献

・ 小学校学習指導要領解説　総則編　（文部科学省）
・ 小学校学習指導要領解説　社会編　（文部科学省）
・ 学校・家庭・地域が力をあわせ、社会全体で、子どもたちの「生きる力」をはぐくむために　保護者用パンフレット（文部科学省）
・ 全国学力学習状況調査からわかること　（次世代教育推進機構ホームページ）
・ 社会指導資料　（教育出版ホームページ）
・ 必見！新指導要録に即役立つ「思考力・判断力・表現力」の評価と授業づくりガイドブックー小学校編ー　（福岡県教育センター）